余はいかにして道民となりしか(2)

深川医師会
深川内科クリニック
野川裕記（のがわひろき）

大阪生まれ、大阪育ちの大阪人である私が、縁あって、現在は道民となってしまったいきさつ第２弾。国立呉病院での研修医２年目の夏休みから話を再開する。1992年の話である。「日本海オロロンライン」。この言葉は魔力をもって内地の人間を誘惑する。例にもれず、私もこの魔力に取り憑かれ、無謀なレンタカーの旅をすることになった。旅をするとはいっても、きちんとしたスケジュールがあるわけもなく、「行けるだけ行って、泊まる所を見つければいいや」という、行きと帰りの航空券と最初の日の札幌のホテルだけを決めて、他は全く白紙の「無計画」な旅であった。今から振り返ると、若気の至りというか、よく帰りの飛行機に間に合ったな、と呆れるくらいの無計画さであった。

１日目は飛行機で広島空港から新千歳空港へ飛び、千歳でレンタカーを借りて、札幌のホテルで一泊。

２日目からは、怒涛のレンタカー旅の始まりである。２日目の朝早くホテルを飛び出て、石狩街道から日本海オロロン街道を目指す。当時はカーナビもまだなく、紙の地図を助手席に広げつつ、案内板を確認しながらの旅であった。おまけに、一人旅。ナビをしてくれる助手席の人間はいないのである。途中で南北を間違え、札幌の南の方に行きかけ、案内板の表示が違うことに気づいて、あわてて逆方向に戻ってことなきを得たこともあった。なにせ、まだカーナビのない時代、紙の地図だけを頼りに北の果てを目指すのは、今から考えたら、「よくやるよ」のレベルである。今は、流石に脳内に北海道マップができあがっているので、カーナビなしでもなんとかなるが、はじめてレンタカーで旅をしようとしている人間に完成された脳内マップなどあるはずもなく、自分ながら「よくやるよ」であった。その日は、はじめて見る「日本海オロロンライン」の絶景に、運転の疲れも感じることなく、なんとか稚内に到着して、無事に宿についたのであった。

次は３日目である。３日目は、自らの無計画さにみずから嵌まる一日になった。３日目は、稚内を朝早く出発し、宗谷岬を観光し、その後、オホーツク沿岸に沿って南下していた。思ったより早く、昼頃に網走についたので（といっても、稚内の宿を朝６時前には出発しているので、５時間は運転しているのであるが）、欲がでた。「もうちょっと先までいけるな」と思ったのが運の尽きであった。網走から原生花園を観光して、斜里を目指す。斜里でもまだ午後の早い時間であった。「ウトロまでは行けるな」と思ってしまい、ウトロへ。ウトロへ着くと、さらに欲がでて知床横断道路へ入ってしまった。知床横断道路を登ると峠は深い霧でなんにも見えない。泣きながら、車を走らせるしかないのであった。必死の思いで、羅臼までいったが、ビジネスホテルなんて見当たらない。今では、宿に困ったら、スマホのGoogle Mapsで検索して電話で予約をすればいいが、当時はまだ携帯電話が普及していない時代である。当然、私も携帯電話なんか持っていなかったのである。なので、駅前のビジネスホテルを探して飛び込めばいいや、という非常に甘い考えのもとで旅を始めてしまったのだが、北海道の田舎は甘くはなかったのである。私は車を走らせながら必死に考えていた、「とりあえず、大きな町に入ったら駅前のビジネスホテルを探そう」と。しかし、いつまで経っても、駅前ビジネスホテルがありそうな町にたどりつかない。道東の現実は、私の甘い想像をはるかに超えていたのである。そうこうしているうちに日が暮れて来てしまった。こうなると、さすがに焦る。そうこうしているうちに、ふと、案内板の「釧路」の文字が目に入ってきた。「釧路まで行けば、なんとかなるだろう。助かった」と思ったのもつかの間。あと２時間は運転しないと釧路にたどりつけない現実を突きつけられ、安堵と疲労が同時にやってきたのであった。標津から国道272号に入り、釧路をめざす。途中で、真っ暗になってしまい、泣きそうになる。しかし、不幸中の幸いか、後ろから地元の車が追い上げてきたので、さきに抜かせると、ものすごい速度で走っていく。「とりあえず、あれについていこう。きっと、釧路をめざす地元の車だろう」と考え、必死に地元の車についていく。そんなこんなで、無事に釧路駅前に到着し、ビジネスホテルにチェックインできたのであった。チェックインの時間は、21時ごろだったから、休憩時間を除いて、最低12時間は運転していたことになる。自らの無計画さに自ら嵌まった一日であったが、その日はなんとか無事に終えたのであった。若気の至りである。今では、「絶対に」こんなことはしない。

次の４日目の旅程であるが、実は記憶がほとんどない。３日目の記憶がすごすぎて、４日目以降の記憶がないのである。多分、摩周湖、屈斜路湖、美幌峠を抜けて、北見へ行き、国道39号で旭川へ行き、道央自動車道で札幌へ戻ったのだろう。道央自動車道をガンガン走っていたら、パトカーに注意された記憶だけが鮮明に残っている。

このようにして、研修医２年目の夏休みは終わり、広島空港から呉市に帰って、国立呉病院での研修医としての日常が再開したのであった。

スペースの関係で、今回はここまで。気が向いたら、続きを書きます。